

Title	波多野精一と敗戦
Author(s)	村松, 晋
Citation	聖学院大学論叢,19(1) : 72-61
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=50
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

波多野精一と敗戦

村松 晋

〔1 問題の所在〕

波多野精一（明治十年～昭和二十五年）は、大正半ばから昭和十年代初頭にかけて、西田幾多郎や和辻哲郎ともども、京都帝大文学部で教鞭を執り、みずからのキリスト教信仰に根ざす、独自の宗教哲学を確立した学者として知られている。全六巻の全集は、『宗教哲学』（昭和十年）、『時と永遠』（昭和十八年）といった、重厚かつ精緻な学術書で占められており、あたかもその巻頭に掲載された、波多野自身の厳格な風貌を象徴するかのようである。

かくして「時論」の類を含まない、全集の「超時代的」性格を反映してか、従来の波多野研究には一定の偏りが見受けられる。すなわち、神学あるいは宗教哲学的な観点から草せられたものもつばらで、その社会認識や時代認識を、いささかなりとも組上に載せた論文は、管見の限り、皆無であるという点である。

こうした研究状況は、その交流圏に、西田幾多郎や和辻哲郎、また、田辺元や西谷啓治ら、狭義の「哲学者」の枠を超え、少なからず時局にコミットした論客を有する思想家への視角としては、明らかに不十分だといわなければならない。日本プロテスタント史上、否、日本思想上において、類まれな業績を遺した波多野の全体像を詳らかにするためには、神学的・宗教哲学的観点に偏った従来の研究成果に対し、今こそ別の視角からする、新たな知見を付け加えていく必要がある。

そもそも波多野について、たとえばその社会認識・時代認識を照射する資料は、全くないというわけではない。全集第六巻には多数の書簡が収録されているが、なかでも敗戦前後の手紙を見ると、波多野がその論文とは一転、実に直裁に、時局への見識を述べていることに気づかされる。それは公開を前提として書かれたものではないだけに、戦時下ならびに米軍占領下の日本を生きた波多野のまなざしを、ありのままに伝える貴重な言葉と考えられるのである。

本稿は以上のような課題意識に則って、これまで触れられてこな

かった、波多野の社会認識・時代認識、なかんずく敗戦前後のそれを、彼が遺した書簡に着目することで、明らかにしようとする試みである。いまだ覚書の域を出ない小論ではあるものの、ここでの試みが、波多野をよりトータルな視点から捉え直すための、一契機を提示するものになりうれば幸いである。

〔2〕「大東亜戦争」と波多野

本稿は波多野の敗戦認識を主軸に据えて論じようとするものであるが、それ以前に戦時下の波多野は、眼前の戦争にいかなる眼を向けていたのか、まず、この点が問われなければならない。既述のように、波多野の交流圏には、「大東亜戦争」の「思想的意義付け」に積極的にかかわった論客が少なからず存在した。波多野が彼らの文章をいかに読み、いかなる評価を下していたか、それらを直接証しする文章は、全集のなかに見当たらない。しかし、遺された書簡を注意深くひもとくと、たとえば次のような興味深い一文に出会うことになる。

さて頂戴の御本（倫理学中巻）先日来深き興味と感激とをもつて読んでをりましたが、今日読みをはりました。平凡な感想を不躰に御耳に入れて失礼とは存じますが、あらゆる点においてこんなにすぐれた著書に出会ったことは私としては近頃初めてでありまして、敬服に堪へないは勿論のこと、特にわが国の文化の将来をおもつて心からのよろこびを禁じ得ません¹⁾。

ここで波多野が「深き興味と感激とをもつて読ん」だと絶賛しているのは、和辻哲郎が戦時下の昭和十七年に公刊した大著『倫理学』中巻である。本書の内容は周知のとおり、天皇に対する「滅私奉公」「義勇奉公」こそ、「人倫の道」であり、「正義」とは、かくして「万民に所を得しめる」あり方を指すとする、明確な主張に集約されるものだった。

波多野が本書のいかなる箇所に「深き興味と感激とをもつ」たのか、右の一節だけからはわからない。また、この手紙が、著者への礼状であることも、割り引いて読む必要があるだろう。しかし、他の書簡でも本書にふれて、「非常に傑出したあらゆる長処をそなへた名著」と述べ、さらに、「はつきりした信念によつて貫かれ」ている点を評価していることから鑑みて、「人倫の道」への「はつきりした信念によつて貫かれ」た和辻『倫理学』中巻を、戦時下の波多野が、「深き興味と感激とをもつて読ん」でいたことは確かだと言わなければならない。

しかしながら、波多野は眼前に展開する戦争を、それこそ、天皇に對する「滅私奉公」「義勇奉公」を行う場などとして、肯定する文章は遺さなかった。戦時中の波多野の心情は、次のような書簡にこそ、典型的に表れている。

今の若い人はわれ／＼のやうにいろ／＼と反省などはせずに、いはゞ「言挙げ」せずに、まつしぐらに時局の真只中に突入して行くやうです。やつぱり戦争をやるにはこれではなくてはいけないのです。しかし戦後にはきつと戦争に関する反省が強く盛

に湧き起るでせう。私にはこんどのやうに關係諸国が戦争をあたりまへの事柄とあたまから認めてかゝり、國際的エゴイズムを露骨に肯定してかゝつてゐる戦争は、近時にはめづらしいやうに思はれます。それだけに、戦争も生きるか死ぬるかの最後の決定を促すやうな苛烈さを示してゐるやうです。文化と生命とを破壊する戦争の暴威を痛切に感ぜしむる、こんどの戦争ほどのものはこれまでになかつたやうに思はれます。果してこれでいゝ、でせうか―戦争の現実の中に没頭してゐる間は、これは禁ぜらるべき問いですが、戦後はきつと思慮及び教養ある人々の心と頭とを悩ますにちがひないといふやうな気持ち私は禁ずることができません³⁾。

公にされた文章のみならず、書簡においても波多野には、いわゆる「大東亜戦争肯定論」に類する言葉は、一切見られない。右の手紙が示唆することく、眼前の戦争の無謀さを問い質し、祖国の将来を憂えるトーンが強くうかがえることは看過すべきでない。

ただ、波多野における戦争否定の根拠を問い直してみると、そこにはキリスト者ならではのまなざしが、いささか乏しい感がある。右の文でいうならば、「文化と生命を破壊する戦争の暴威」という一言が示唆するように、波多野において戦争は、キリスト者として、その張り詰めた実存から否まれるものというよりも、ただ「文化」への関心・その存続への危惧のゆえにこそ、否定の対象となっている印象を受ける。たとえば次に掲げるように、ナチス崩壊の知らせを受けた便りで

も、その眼は、「ドイツ文化」の帰趨にこそ、注がれているのが興味深い。

かねてひそかに恐れた事、予期した事ではありますが、ドイツもとう／＼仆れました。これはわれ／＼にとつて大きな痛恨事であります。しかし、ドイツはきつとまた起ち上るにちがひありません。尤もそれは文化の方向精神の方向においてでありませうが。ナチス主義は勢力を失ふでせうが、それは大体において決して悲しむべきことではありません。ナチズムはドイツの国民精神を鼓舞発揚した功績はたしかにあります。しかし払った代償も可なり高価だつたのです。かのスパルタ式の軍国主義、窮屈極まる統制主義画一主義は天才や独創心を萎縮せしめました。あの偏狭な民族的独善主義は毛嫌ひした猶太人の選民思想と何の択ぶ所がありませんか。御用哲学御用文学御用科学の横行闊歩する処には優秀な独創的文化の育つ余地はないでせう。かう考へますと他山の石といふ感じを全くはらひのぞけるわけには行かぬかと存じます⁴⁾。

右の書簡を見る限り、波多野がナチズムに批判的なのは、キリスト者として、その擬似宗教性が認められないからでも、その侵略主義が許せないからでもない。彼がナチス崩壊につき、「決して悲しむべきことではありません」と述べるのは、ナチズムが「天才や独創心を萎縮せし」め、「優秀な独創的文化の育つ余地」を排除・殲滅したからにほかならない。いわば波多野はナチズムを、キリスト者としてという

よりも、「思慮及び教養ある人々」の一人としての立場から、批判しているのである。

顧みて、波多野が和辻の『倫理学』中巻を褒めたのも、まさに「わが国の文化の将来をおもつて心からのよろこびを禁じ得」なかつたらだつた。すなわち波多野は、ここでも「思慮及び教養ある人々」の一人としての立場から、「文化」への関心に基づいて、和辻の著作を讃えたのである。

戦争をはじめ、現実に向き合う際の、波多野のこうしたスタンスは、波多野研究を志すものに、ひとつの論点を投げかけているように思われる。事実、敗戦後十年を経た昭和三十年、「近代日本とキリスト教」を考える座談では、波多野に近い人々からも、既にこんな指摘がなされているのを看過すべきでない。「どうも波多野先生の眼中には、日本の現実よりも海外の学会のあるサークルのことがあるといった高踏的な態度があつたのではないかとも思われる」「もし波多野先生が、西田先生や田辺先生と同じように、現代の精神的境位に立たれて、あの深い学殖と強靱な思索力をもって、キリスト教の立場から現代の問題と対決して下さつたら」⁵⁾

この指摘は、波多野逝去から五年後になされたものであり、その聲咳に接しえた人の率直な見方として、傾聴に値する。爾来、五十年を闊した今日、この発言を知る人も、少なくなつたに相違ないが、しかし、右記の指摘は、波多野研究に携わる者のみならず、日本プロテスタント史に関心を有する者が、等しく負うべき重要な問いかけに思わ

れる。この問題に関しては、後にもう一度取り上げることとしたい。

「3 敗戦をめぐる真情——明治の栄光——」

昭和二十年八月十五日正午、「終戦」を告げる昭和天皇の肉声を、波多野もまた聴いていた。眼前の戦争を、「文化と生命とを破壊する戦争の暴威を痛切に感ぜしむる、こんどの戦争ほどのものはこれまでになかつた」と痛嘆した波多野は、当然ながら、この「玉音放送」に、心揺さぶられた一人であつた。事実、彼は放送後ほどなくして、次のような趣旨の手紙を、したためている。

拜啓 本日正午、ラヂオによつて陛下の玉音を拝し、感激措く所を知らませんでした。ご英断、何といふありがたさかたじけなさでせう。不完全なラヂオの前に聴き落さじと延び上つて耳を傾けながら、私は思はず感涙に咽びました。これでわが国わが国民わが文化は破壊より救はれました。：尤もこれからどんな困難がわれ／＼の行くへを遮り現はれるでせうか。しかしどんな困難でもそれを克服し得べき途は開かれ、復興と発展との望みはわれ／＼の進路を照してをります。御持論通り、国体と歴史とに基を据ゑ、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設は、われ／＼のたふとき、よろこびに充ちたる、新しき任務でなければなりません⁶⁾

『宗教哲学』、『時と永遠』の著者であるキリスト者・波多野のイメー

ジからすると、「陛下の玉音を拝し、感激措く所を知りませんでした。ご英断、何といふありがたさかたじけなさでせう」と天皇への思いを告白し、さらに戦後日本の使命に關しては、それが「国体と歴史とに基を据え、精神と道義とに生命の中心を置く、わが国の文化の建設」だと言いつ切る姿勢など、「意外」の念をもつて迎えられるかもしれない。

しかし、この時期の波多野の書簡は、おおよそ、こうした「告白」で占められており、また、彼がかねてより、「国体」を重視していたことは、戦局も押し迫った八月十二日、「一億玉碎などといふこけおどしの声も以前より聞えてをりますが、これはとんでもない事で、国民をも、それどころか国体をも犠牲にしてさ、やかな名誉欲を満足させようとする自暴自棄の声でなくて何でせうか。」と強い調子で書いていることから明らかである。

ただし、「聖断」や「国体」へのこうしたまなざしは、キリスト者・波多野において、何ら「矛盾」するものとは捉えられていなかった点を考慮する必要がある。波多野をして右のような吐露をなさしめたのは、その若き日の時代経験、ことに、「自由」の時代としての、「明治」への確信だった。

物には裏もあり又弊も伴ふのでありますが、私などのやうに若い時から自由主義のうちに呼吸して来たものには、日清戦争以来の新領土は無くなつても、国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された明治時代の理想が復活するであらうことは、又となきよろこびなのです。私はこんどのありが

たき御詔書において、総理大臣の宮の国民に告げられた御言葉において、明かにその曙光を認めうるやうな気が致します。⁸⁾

波多野のなかで「明治」とは、「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された」、恵まれた時代としてイメージされていた。実は最後に言及するように、何気なく言われたこの言葉には、「国体の精神」が支配する世俗領域と、信仰生活の領域とを、別個に捉えてそれぞれを区別する、いわば二元論的な思考がこいまま見える。しかし、波多野の実感に即していえば、「国体の精神を戴きつ、」キリスト者であることは、ましてや「思慮及び教養ある人々」の一人であることは、互いに「衝突」するものであるどころか、何ら問題なく統一されることであり、しかもそれが可能となったのは、「明治時代の理想」のゆえと自負されたのだった。

然らば、かくも恵まれた時代をすごした祖国日本は、なにゆえ「自由主義」を圧殺するのみならず、「生きるか死ぬるかの最後の決定を促すやうな苛烈さを示」す戦争に突入し、ついに「文化と生命とを破壊する」に至ったのか。波多野においてその訳は、彼のいわゆる「明治時代の理想」に内在するものとは、当然ながら、見なされていなかった。この問題に關しては、たとえば次のような「戦争理解」が示唆に富む。

御詔書によつて、多数の国民は指導者たちが彼等に強い無知と自惚の夢よりさまざま真の自覚へと向ふべき機会を与へられたものだと思は信じます。⁹⁾

陸軍軍閥が国体護持とか皇室中心などと呼んでゐるものの中には、自己の階級の特権利益等の支持者として皇室又は国家を利用してしようと甚だ危険な、乃至不敬な要素が多分に含まれてゐる事が明かだと思ひます。こんどの戦争終結によつて軍閥といふ特権階級が姿を消すであらうことは、私の衷心よりのよろこびを禁じ難い所であります。¹⁰⁾

私はずつと以前から、日本が武力主義をとつたことは、根本的の誤りで、何と弁護しようと支那事変は事実上侵略であると信じてをりました。又大東亜戦争も、根本においては、軍人や指導者たち、並びに彼らに誤り引摺られた国民の、無知自惚の夢より起つたのだと信じてをりました。戦争が終り、正真正味の敗戦ときまり、今まで秘密にされてゐた事情も一部分ははつきりと公表されるやうになり、ます、その感を深く致します。¹¹⁾

ここに明らかなように、波多野は戦争の要因を、いささかシンプルな二項対立図式として把握した。すなわち、この戦争は「陸軍軍閥」といった人々が、波多野の享受してきた「理想」、すなわち「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された明治時代の理想」を退けて、「武力主義をと」るなかで引き起こしたものであり、一方、天皇も含め「多数の国民」は、彼らに「無知と自惚の夢」を強いられて、「誤り引き摺られ」てきた、文字通りの「被害者」だとの図式であった。波多野は「昭和の戦争」を、「明治の理想」を体験しえた者

の立場から、以上のように理解した

こうした対立図式に基づいて、かの戦争を理解するならば、敗戦は、「明治時代の理想」を蔑した面々が一掃されることにより、あらためて「明治時代の理想」が建てられるための「好機到来」と期待されるのは必然だった。事実、波多野は戦後日本のグランドデザインを、「明治時代の理想」の「復活」として、次のように語っている。

記者団との会見における、首相の宮殿下の御答へは、今までの御座なりの声明などと雲泥のちがひで新内閣の為政の方針、従つて今後の国是を大膽率直に明瞭に力強く開陳したものと、深き感銘をもつて読みました。殊に圧迫に対して自由を、武力主義に対して文化主義を、侵害主義に対して平和強調主義を、新しき日本の理想として掲げた点は、衷心よりの感激と満腔の尊敬とを喚び起こさずにはゐられません。私どものやうに明治時代に育つたものは、その真の精神その深き魂が、新しき時代を導くべき炬火となつて国民の行く手を照さうとしてゐるのを見て、なつかしさうれしさで胸一杯になります。私は以前より日本は明治時代に帰らねばならぬことを痛感してをりました。最近には領土などは擲つて明治時代の昔に返り謙虚と聰明との精神をもつて裸一貫より出直すべきであると信じ、東京の某氏と文通によつて肝胆相照らしてゐたのであります。¹²⁾

ここで波多野が賞賛する、「首相の宮殿下」の「御答へ」とは、東久邇宮稔彦首相が、米軍上陸の八月二十八日、記者団を前に行った会見

のことで、いわゆる「一億総懺悔」論として知られるものである。しかしながら、右の引用に明らかなように、波多野はこの点に重きを置いた読み方は、全くしていない。手紙は、会見が新聞に掲載された八月三十日の翌日に、さっそくしたためられており、読後、波多野が受けた感銘の大きさを、照射するものとなっている。

波多野のこうした読み方自体、興味深い論点をはらんでいるが、ここで注目したいのは、波多野が文中、「圧迫に対して自由を、武力主義に対して文化主義を、侵害主義に対して平和協調主義を、新しき日本の理想として掲げ」て進みゆくことを、戦後日本が、ようやく手にすることを得た、新しい針路としてでなく、「明治時代の昔に返」ることとして、表現している点である。

このことは、いわゆる「古き良き時代」への「郷愁」に基づいた、「復古志向」などでは毛頭ない。「圧迫に対して自由を、武力主義に対して文化主義を、侵害主義に対して平和協調主義を掲げ」ることが、「明治時代の理想」と同義に解されている事実が証しするように、波多野にとって「明治時代の理想」とは、時代や地域を超えてきた、普遍的な国家理想にはかならなかった。それだけに「明治時代の昔に返」とは、彼がその生涯を賭けて求め続けた、普遍的なもの、理想的なもの、の再確立が含意されていた。

右記の手紙がしたためられた、翌々日の九月二日、東京湾に停泊中の戦艦ミズーリ号船上で、降伏文書の調印式が執り行われた。日本の敗戦、確定の時である。「日清戦争以来の新領土」獲得の歴史を生きて

きた、「明治人」波多野にとって、この日は、人間的には、「悲痛」な思いを禁じえなかったかもしれない。

しかし、「玉音放送」一週間にして、すでに「日清戦争以来の新領土は無くなつても、国体の精神を戴きつゝ、自由主義の恩沢に浴することを許された明治時代の理想が復活するであらうことは、又となきよるこびなのです」と述べていた波多野は、この未曾有の事態に臨んでも、たじろぐことはなかった。「明治人」波多野は、来るべき日本に、「日清戦争以来の新領土」以上の世界、「国体と歴史とに基るを据ゑ、精神と道義とに生命の中心を置く」、いわば真の「明治の栄光」をかいまみていたからである。

降伏文書調印から三日後の九月五日、波多野がさっそくものした書簡には、戦後日本に託された、彼の希望が率直に記されている。その筆致は、『全集』巻頭に掲載された厳格な風貌と精緻な学術論文からは、想像もできないほどに、素朴で飾らず、明るさに満ちたものだった。

総理大臣の宮殿下の記者団への御答へを読んで、その率直な誠実な態度にいたく打たれました。将来の国是として自由、平和、文化の三つの理念を高く掲げてゐる点には、満腔の共鳴と感激と感謝とを覚ええました。これではなくてはなりません。これこそわが国が新しく又永遠に生き得る所以でありませう。全体主義や武力主義で心がゆがんで育て上げられた今時の若い人たちは、明治の御世の新鮮な空気は無邪気に吸つたわれ、老人のやうに無邪気な感激を感じないかも知れません。…かういふ理

念が国民の進み行く道の行手を照す炬火として掲げられた事その事だけでも、大変な変革です。実にうれいしい事です。それに付けても、私は長生きがしたくなりました。私はもう年老い、精力は殆ど使ひ尽して、新しき時代の建設に何の新しき貢献をもなし得ぬであります。しかし、私はその新しき世界の希望の曙光を身に浴びるまで、この世に留まるを許していただけるならば、何といふ幸福であります¹³⁾。

想えば波多野は、敗戦後間もない書簡のなかで、「新しき任務」「新しき生」そして「新しき御世の新しき光」等々、戦後日本を「新しき」という言葉で形容し、またそこに、「光」のイメージを重ね合わせてやまなかつた。波多野にとって敗戦は、この「光」を覆い隠してきた「全体主義や武力主義」が一掃されるなか、「自由、平和、文化の三つの理念を高く掲げ」た「明治時代の理想」が、「国民の進み行く道の行手を照す炬火」となるという、「希望の曙光」そのものにほかならなかつたのである。

「4 おわりに —「オールドリベラリスト」としての波多野」

以上、本稿では、日本プロテスタント史上、類稀な業績を遺した波多野精一その人を、「時代」を生きた一人の思想家として、よりトータルな視点から捉え直す契機を探るといふ立場から、従来の波多野研究で等閑視されてきた、彼の社会認識・時代認識に肉迫すべく、遺され

た書簡に着目した考察を行ってきた。

これまで詳らかにしてきたように、波多野は決して現実に無関心ではなかつたが、かくして現実に対峙する波多野の基幹となつたのは、キリスト者としての自覚というよりも、「思慮及び教養ある人々」の一人としての自覚、なかならず、「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された明治時代の理想」を生き得た者としての自負にこそあつたとみることができる。

こうした波多野のまなざしを、いかに捉えていくべきか、それは「大東亜戦争」下の波多野のあり方を考慮にいれた、主要著作の再読ともども、今後の波多野研究に課せられた、日本プロテスタント研究史上の課題といえるが、この点を議論するための手がかりとして、波多野より三十七歳年下になる、丸山眞男の言葉を引用しておきたい。丸山は、昭和二十五年のある座談において、津田左右吉を念頭に置きつつ、次のような「世代分析」を述べている。

あんなに素晴らしかつた日本を後の奴がめっちゃめっちゃにしてしまったという感じと、そんなめっちゃめっちゃになるような「素晴らしさ」はもう真つ平御免だという感じとの間には大分ズレがあり、それが学問の世界でも、例えば老大家と若い歴史家との間の問題意識のちがいで現れてきている¹⁴⁾。

本稿で見てきた波多野のまなざしは、丸山のこの著名な指摘そのままに、「老大家」津田左右吉にも相通する、典型的な「オールドリベラリスト」のそれである。丸山は右の発言に続け、「昭和になつて急に

横合から軍部という乱暴者が出てきてせっかくの先代の苦心の経営を台なしにしてしまったという風に理解せずに、これをどこまでも明治時代に内在していた契機の顕在化として捉えなければならぬ」「日本の興隆と没落、成功と過誤とをどこまでも一つの問題として捉えて行くことが必要⁵⁾」との指摘をしているが、波多野はまさに、「昭和になって急に横合から軍部という乱暴者が出てき」たせいで、「あんなに素晴らしかった日本」が「めっちゃめっちゃ」になったと考えていたことは明らかであり、従って、「日本」が「めっちゃめっちゃ」になったことを「明治時代に内在していた契機の顕在化」と捉える見方には、到底、与しえなかったと思われる。

ここで、彼我の見方の「正否」を検討することは試みないが、ただ、丸山の指摘をふまえたうえで、あえて論点を提出するならば、やはり、先に質した波多野の言葉「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された明治時代の理想」、この表現が、看過し得ない問題性を胚胎しているように思われる。

波多野において、みずから「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴することを許された」のは、その、「恩沢」ならびに「許された」という表現が示唆するように、「明治時代の理想」の、いわば賜物として感じられていた。しかし、波多野が「国体の精神を戴きつ、自由主義の恩沢に浴」しえたのは、それを「明治時代」が「許」したがゆえというよりも、むしろ波多野その人が、みずからの信仰と異質ないし対極の精神を「戴きつ、」行くことを問題としなかったから、言

い換えれば波多野において、その信仰と現実との緊張関係が希薄であったから、このように見直すこともできるのではないだろうか。

「国体の精神を戴きつ、」キリスト者である「恩沢に浴することを許された」という言い方には、両者が何の緊張感も、あるいは内面的な結びつきも持つことなく、単に並列・同居している精神のあり方が表れていると指摘するのは、あるいは「言いすぎ」かもしれない。しかし右記の発言には、たとえば「国家の理想」を説いて現実国家の混迷を撃つた矢内原忠雄、キリスト教の神観に徹することで、田辺元の国家論を問い質した南原繁らのように、信仰という超越的批判原理によって現実を相対化せんとする、超越的普遍者にとらわれた者ならでは実存的緊張は、残念ながら見出せないように思われるのである。

このほかにも書簡のなかには、戦後の労働運動や米軍へ言及等、考究に値する興味深い言葉が散見され、また、戦後の波多野における可能性にも、当然ながら言及しなくてはならないが、これら諸点に関しては、別稿にてあらためて考察を加えることとしたい。

注

- (1) 和辻哲郎宛 昭和十七年八月十八日 『波多野精一全集』第六巻、岩波書店、一九六九「以下、本巻からの引用は、『波多野』と略記」一七三―一七四頁。

- (2) いずれも松村克巳宛 昭和十七年八月二十一日 『波多野』二六四頁。なお戦時中の松村の言動についての評価は、宮田光雄「権

威と服従 近代日本におけるローマ書十三章』新教出版社、二〇〇三、一六六〜一七三頁を参照。

(3) 香川鉄蔵宛 昭和二十年六月二十八日、『波多野』、三四九頁。

(4) 佐藤洽六宛 昭和二十年五月三十日、『波多野』四一九頁。

(5) いずれも久山康の発言 久山康編『近代日本とキリスト教』創文社、昭和三十一年、二九九〜三〇〇。

(6) 香川鉄蔵宛 昭和二十年八月十五日 『波多野』三五七頁。

(7) 村岡典嗣宛 昭和二十年八月十二日 『波多野』一〇四頁。

(8) 石原謙宛 昭和二十年八月二十三日 『波多野』二四九頁。

(9) 松村克己宛 昭和二十年八月二十五日 『波多野』二八二頁。

(10) 香川鉄蔵宛 昭和二十年九月一日 『波多野』三五九頁。

(11) 香川鉄蔵宛 昭和二十年九月十一日 『波多野』三六〇頁。

(12) 松村克己宛 昭和二十年八月三十一日 『波多野』二八三頁。

(13) 石原謙宛 昭和二十年九月五日 『波多野』二五一頁。

(14) 丸山眞男「座談会 日本の運命―興廢の岐路」『世界』昭和二十五年三月号 『丸山眞男座談』第二卷、岩波書店、一九九八、二三八頁

(15) いずれも丸山、同右、二四〇頁

Seiichi Hatano and Defeat of Pacific Wars

Susumu MURAMATSU

This study focuses on letters of the well-known theologian Seiichi Hatano from around 1945 that clarify his perception of society and of the times. It becomes clear through this study that one side of Hatano was that of an “old liberalist” who had great pride in the Meiji era.

Key words: Seiichi Hatano, the Meiji era, the old liberalist, Christianity